不定期刊行　　第521号　2014.09.03

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
大町高等学校

「高みへ　大人の山岳部」笹倉孝昭著（東京新聞出版局刊）

岳人に連載されていた「大人の山岳部」が単行本として出版された。出版元はもちろん東京新聞出版局だ。連載中から興味深く読んでいたのだが、今回連載中の記事に若干の筆を加えられパワーアップしての出版である。

笹倉孝昭さんは序文で「本書はいわゆるマニュアルではない。登山者の行動パターンを決めるためのものではなく、登山者としての完成度を高めるための取り組み方を示したものだ。そのため、あくまでも基礎的なことにしか触れていない。くれぐれも経験豊富な指導者の下で登山経験を積み重ね、さらには実際の登山経験からしか得られない貴重な知恵を学び取ってほしい。」という。インターネット時代の今、山の知識は溢れている。キーワードで検索すればたちどころに知識は目の前に提示される。しかし、それはあくまでも細切れの知識である。この便利な状況に対し、笹倉さんは「登山とは異なる活動の集合体である。何かを知ろうとするときに、キーワードで検索することが習慣化した現代だからこそ、個々の活動を切り離すことなく、集合体として紹介する必要性を感じた」ことが本書を書くきっかけになったともいっている。だが、しかしここに書かれているのはあくまで知識それは、基礎的な事項だ。「山で必要なのは、それを知った上で身につけるべき知恵だ」という。笹倉さんのこの本に込められたメッセージは極めて明確だ。そして、この考え方には全面的に同意できる。「細切れの知識を知恵へ」――学生時代に山岳部で学べなかった大人たちと若者に送る一冊という帯に書かれたことばさながらに、高校山岳部を指導する指導者、また生徒にもぜひ読んでほしい一冊だ。

改めて山岳部引率旅費問題――たかが入浴代、されど入浴代

7月の県教委に対する高教組の独自要求書提出交渉でのやりとりが、8月5日付の「長野高教組新聞」に載っていた。「山岳部の入浴代については当局が支給を明言しました。」極めて短い文ではあるが、この一文の持つ意味は大きい。2001年以来の山岳部の旅費をめぐる交渉では、これまで多くの積み重ねがあった。現場の事務担当者は、県のマニュアルを盾に、本来想定されていない「山岳地域の引率」をも同列で対応しようとする。貴重な県税を使うのだから、このことそのものは責められないし、当然のことである。しかし、山岳部の引率は通常のそれでは対応できない部分があることは、県も当初から認めており、それについて、ある部分では交渉の中で県から言質をとることで、またある場合は現場の教師と事務担当者とのやり取りの中で、少しでも現実に即した対応をお願いして来た。そうしてそれらは既得権として全体のものとなってきた。燃料費や電池代などの消耗品や水代、領収証がなくても出してもらえるものとしてのチップトイレ使用料、入下山口の異なる場合の車の転送代など当初は出なかった部分について、いくつかの特例を認めてもらってきた。そして、宿泊費と一体のものと考えられる入浴代もその一つだったはずである。

この春大町に転勤して来た僕が、県的なレベルで認められていたはずの登山行動中の宿泊日の入浴代について、請求したところ担当者からは「マニュアルにないので出せません」とにべもなく却下された。かつて僕が県執をしていたときに、当時の県教委の教職員課係が明確に支給を明言したことでもあり、決着済みの事例であることを事務担当者には伝えたが、「明文化されたものが残っていないので出せない」とあくまでも頑なだった。そこで、状況のよく分かっている高教組の下岡副委員長に伝え、交渉で改めてこのことを確認してもらうことにした。交渉の場では、口火を切った下岡さんの発言に続いて、木曽青峰高校分会の塩川先生が現場の様子を訴えてくれたということだ。その結果が、冒頭のニュースの通りの回答だった。要求書提出交渉という場ではあったが、過去の交渉で確認されていたことであった上に、今年度の旅費支給にも影響することだったことも相まってだろう、明確な回答が示された。たかが入浴代、されど入浴代だ。具体的には、県大会や下見時の入浴代、さらには今週末山岳センターで行われるクライミング研修会時のユープル木崎での入浴代などに即反映させることができる成果である。

編集子のひとりごと

東京新聞出版局から出版されていた岳人が8月号をもって廃刊となった。先に紹介した「大人の山岳部」の著者は山岳ガイドの笹倉孝昭さん、編集担当されたのは矢島智子さん。このお二人とは少なからずお付き合いがある関係で、出版と同時にいち早く矢島さんが送ってくださった。元々東京新聞の記者で、山とは無縁な矢島さんが岳人編集部に配属替えになったのは、2012年の5月。それまで山のことは全く知らなかった矢島さんの最初の仕事が、2012年5月に小蓮華での九州のパーティの大量遭難事故の分析記事だった。偶々、小生がその場に居合わせたことを別のメディアで知ったことから、小生へも取材依頼があり、ご協力した。それが同年7月号の記事となったのだが、これがご縁でその後も何度か記事への協力をした。その折、矢島さんが「全く畑違いのところへ来たけれど、山を知らない記者としてその目で岳人の編集を支えて行きたい」と言われたことが思い出される。さらに続けて矢島さんは、「山岳雑誌の使命としての山の紹介が一方でその良さばかりを喧伝することで、未熟な登山者をも身の丈を越えた登山へと誘う現実を生み、それが事故を増やす原因をつくっているのではないか」という良心にみちたお話をされ、それに対して僕もマスコミ報道や自立した登山者についての一定の考えを伝えたのだった。取材が終わっての帰りがけ、それとつながる話として、笹倉さんの連載の端緒となる2012年8月号の岳人「笹倉孝昭さんの大人の登山教室」の企画が進んでいるという話があり、矢島さんがその担当だということを聞いたのだった。

一方著者の笹倉孝昭さんは、極めて理論家で、筋の通った説明のできるガイドである。僕が毎年2回お手伝いしている国立登山研修所の安全登山指導者中央研修会で、一緒に講師を務めている関係でいろいろ教えていただいている。「大人の山岳部」は笹倉さんの丁寧な説明がそのまま具現化したようなわかりやすい本となっている。

ともあれ、東京新聞出版局の岳人はもう読めない。版型が変わり、紙質の変わった新生岳人9月号はやはり別物だった。個人的な思いを言えば、僕自身関わった「高校山岳部の仲間たち」の連載ももうない。東京新聞の岳人から生まれた最後の単行本と最後の連載となった「大人の山岳部」は、山岳雑誌岳人の精神が生んだ書だった。（大西）